

早期粵語、想定内の変化

竹越美奈子

早期粵語資料（19世紀から20世紀にかけて主として西洋人によって編纂された粵語の教科書・辞典類）を見ると、この言語がわずか100年あまりの期間にダイナミックな変化を遂げたということがわかる。筆者はこの点に関心を持っている者の一人である。そこで、筆者がこれまでに気づいた変化について、以下にまとめて記そうと思う。

1. 量詞から指示代詞へ

現代広東語の遠称の指示詞は“個”[ko35]（陰上）であり、これは量詞の“個”[ko33]（陰去）に由来する。この変化が資料に反映されたのは、Chalmers(1859)以後である。この変化で特徴的なのは、すべての指示詞が一律に変化したのではなく、(1)一定の条件下で使用されるものだけが先に陰上に変化し、(2)一語が二つの形を持つことは不安定なため、結果的に他の条件下で使用されるものも陰上になったということである。具体的には、Chalmers(1859)とLobscheid(1864)において、後続の量詞が[ko33]である場合（以下甲類）、つまり“個個那個”における指示詞のみが陰上で表記され、その他の場合（以下乙類）、たとえば他の量詞が後続する“個支那支”などの場合の指示詞は陰去のままであった。甲類の変化には意味弁別上の困難という動機がある。指示詞と量詞が同形であると、“個個（指示詞＋量詞）「その、あの」”と“個個（量詞＋量詞）「すべての」”が同形になってしまって区別ができなくなるのである。(1)の変化は比較的短期間に変化が完了したが、(2)の変化には時間がかかった。これは(1)の変化が意味の弁別にかかわるといふ明確な動機をもっていたのに対して、(2)の方はそうでもなかったためと考えられる。また、他の声調から陰上へと変化するのは、高昇変調と呼ばれ、粵語に普遍的な現象である。

以上をまとめたのが表1である。

表1：量詞[ko33]（陰去、“個”）から指示代詞[ko35]（陰上、“個”）への変化

資料の年代	甲類		乙類			
	声調	漢字	声調	漢字		
1828-1858	陰去	個	陰去	個		
1859-1864	陰上		個		陰去／陰上	個／個
1869-1918		陰上		陰上	個	
1947-現在				陰上		

2. 結構助詞から量詞へ

現代広東語の不定量を表す量詞“啲”[ti55]（陰平）は結構助詞の“的”[tik5]（上入）に由来し、発音は[tik]の入声陰尾[-k]が消失したものと考えられる。実際 19 世紀初めの資料では Morrison(1828)を除いて、[tik/ti]の両方の表記が混在していたが、19 世紀末には[ti]に統一されている。用法に関しては、19 世紀初めの資料では、現在と違って単数を含むすべての名詞に対して使用することができた。現在の“啲”[ti55]は不定の少量を表すものであって、単数の名詞には使えない。（ところで、量詞は類別詞とか「助名詞」とも言われるように、名詞を何らかのカテゴリーに分けるもの、とも考えられる。それでは当時の[tik/ti]は量詞として何のカテゴリーを表していたのだろうか。この点についてはまた考えたい。）

変化の動機について、筆者は統語構造上のあいまい性に起因する再分析と考えている。粵語語法では、量詞は数詞および指示詞と連用されるほか、結構助詞のように定語構造にも使用できる。たとえば、“我的書”のような名詞句の場合、“我”と“書”の間の語彙は、普通話の語法上では結構助詞としか解釈できないが、粵語の語法ではこの位置に量詞を使用できるため、“的”を量詞と解釈することも語法上は可能である。それによって、話者が“的”を量詞と再分析し、初めのうちは結構助詞と同様すべての名詞に使っていたが、個々の名詞はそれぞれ専用の量詞（いわゆる“張、枝、個、隻”のような）をもっているため、それらの量詞との戦いに破れ、専用量詞が担えない領域、すなわち不定量を表す専門として生き延びたのである。粵語では、普通話などと違い、原則として数詞や指示詞がなくても名詞には量詞を使わなければならないので、こういった、具体的な量を考えなくてもよく、しかも数えられないものにも使える便利な量詞の存在が待ち望まれていた、とも考えられる。以上をまとめると、表 2 のようになる。

表 2：結構助詞[tik5]（上入、“的”）から量詞[ti55]（陰平、“啲”）への変化

資料の年代	発音	漢字	品詞	用法
18 世紀以前	tik	的	結構助詞	すべての名詞
19 世紀前半	tik/ti		量詞／結構助詞	
19 世紀後半	ti	的／啲	量詞	複数／不可算名詞
20 世紀以後		啲		

3. 複数の接尾辞[ti]>[tei]

“哋”[tei33]（陰去）は、人称代名詞の後について複数を表す接尾辞である。19 世紀初頭の資料では発音が[ti33]と表記されていた。しかし、この[i]>[ei]という変化は、この語彙における孤立的な変化ではなく、19 世紀から現代に至るまでの間に粵語が経験した体系的な母音推移（高田(2000)参照）を反映するものである。

表 3 : “㗎” の表記

資料	発音	漢字 () 内は少数の用字
Morrison(1828)	ti	的
Bridgman(1839)	ti	㗎、(地)
Devan(1858)	ti	㗎
Dennys(1874)	ti	㗎、(地)
Stedman & Lee(1888)	ti	㗎
Fulton(1888)	ti, te	㗎
Ball(1888)	tei	㗎、(地)
Ball(1902)	tei	㗎
Jones(1912)	te, tei	㗎
Chao(1947)	tei	地

4. おわりに

以上をまとめると、粵語語彙の変化にはいくつかのパターンが認められる。発音の変化には、高昇変調、入声陰尾の消失、体系的変化の反映があり、変化の動機としては、意味弁別上の困難の回避、再分析などが考えられる。以上はいずれも特異な孤立的な事象というよりは、言語に普遍的な現象である。言語がダイナミックに変化したと言っても、その変化のパターンはむしろ保守的とも言えるものである。言語の変化に想定外などというものはないのだろうか。他の事象についても詳細に調べて、変化のパターンをまとめることを今後の課題にしたい。

参考文献

- 高田時雄(2000)「近代粵語の母音推移と表記」『東方學報』 vol.72.
 張洪年(2006)「早期粵語「個」的研究」『山高水長:丁邦新先生七秩壽慶論文集』 p.813-835.台北:中央研究院語言學研究所.
 竹越美奈子(2005)「廣州話遠指詞“㗎”的歷史演變」『中國語文研究』 2005(2), pp.19-24.
 竹越美奈子(2011)「試論早期粵語中的“的”」『早期粵語研究 1』 58-70 頁.

早期粵語資料(arranged chronologically)

- Morrison, Robert .1828 *Vocabulary of the Canton Dialect*. Macao: G. J. Steyn & Brother.
 Bridgman, E.C. 1839 *A Chinese Chrestomathy in the Canton Dialect*. China: S.Wells Williams.
 Williams, S. Wells. 1842 *Easy Lessons in Chinese*. Macao : Office of the Chinese Repository.
 Devan, T.T. 1858 *The Beginner's First Book, or Vocabulary of the Canton Dialect*. Hong Kong: China Mail Office.
 Chalmers, J.(1859) *An English and Cantonese Pocket Dictionary*. Hong Kong: London Missionary Society's Press.
 Dennys, N.B. 1874 *A Handbook of the Canton Vernacular of the Chinese Language*. London : Trübner

& co./ Hong Kong: China Mail Office.

Ball, J. Dyer. 1888 *Cantonese Made Easy*(2nd ed.). Hong Kong: China Mail Office.

Fulton, A.A. 1888 *Progressive and Idiomatic Sentences in Cantonese Colloquial* (3rd ed.). Hong Kong : Kelly & Walsh, Ltd.

Stedman, T.L. and Lee, K.P. 1888 *A Chinese and English Phrase Book in the Canton Dialect*. New York : Brentano's.

Ball, J. Dyer. 1902 *How to Speak Cantonese* (2nd ed.). Hong Kong: Kelly & Walsh, Ltd.

Jones, Daniel, and Kwing-Tong, Woo. 1912 *A Cantonese Phonetic Reader*. London: University of London Press. (魚返善雄訳『廣東語の發音』1942年 東京：文求堂)

Chao, Yuen Ren. 1947a *Cantonese Primer*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Chao, Yuen Ren. 1947b *Character text for Cantonese Primer*. Cambridge, MA: Harvard University Press.